

「バルナバとサウロ 宣教旅行に出発する」

2016年06月06日

使徒言行録13章1節～3節。アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

主イエスの愛に倣い、篤い信仰の絆で結ばれたエルサレム教会の信者たちは当初、ユダヤ教徒から好意を持って受け入れられ、信者の数を増していた。ところが、ユダヤ教徒がモーセの律法と彼らが信仰の拠りどころ、また荘厳さを誇ったエルサレム神殿を、ステファノがないがしろにし、神を冒瀆しているとして、殉教死して以来、迫害を受けるようになった。迫害を受けて、使徒たち以外の多くの者たちは北のフェニキア、キプロス、アンティオキア方面に逃れた。アンティオキアは現在のトルコの南東部にあたる。トルコ、シリアの国境付近で今、混乱の最中にある。

アンティオキア教会に逃れて来た者たちは異邦人信者を加え、異邦人教会として大きく成長していった。この教会には、キプロス出身のバルナバ、リビア出身のニゲル（ラテン語で「黒」の意）と呼ばれたシメオン、ガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスの幼な友たちのマナエン、そして、バルナバから呼び出されたサウロなどがいた。「預言する者や教師たちがいた」と記されているが、預言する者とは福音を語る者で、教師とは福音に従って生きるように教える者である。アンティオキア教会に集まった者、また信者になった者たちは福音を証し、その福音に従って生きるように互いに励まし合っていた。

彼らは熱心に礼拝を捧げ、罪を悲しみ、困窮にある者を覚えて、断食をしていた。すると、聖霊が「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために」と告げた。み告げを受けた教会は断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。この按手は職能委任の按手ではなく、新しい奉仕を神の恵みに委ねる按手である。

バルナバとサウロは第一回の宣教旅行に出発した。この時、主導権を握っていたのは、バルナバであろう。彼の故郷キプロス宣教に向かっている。彼は、迫害していたサウロを使徒たちに執り成し、また郷里タルソスで悶々としていたサウロをアンティオキア教会に連れて来た。そして、共に教会生活をする中で、信仰を深め、異邦人宣教をしようという共通の願いを持つようになったと思われる。

サウロは後に、ギリシア名でパウロと言われるようになるが、異邦人宣教に命をかける。そのパウロの宣教旅行を支えたのがアンティオキア教会である。アンティオキア教会の存在はどんなに高く評価してもし過ぎることはない。バルナバとパウロ、パウロとアンティオキア教会との出会いは、後の教会の歩みに決定的な意味を持つものとなった。

人は不思議な出会いを経験する。私も母教会で吉新治夫牧師に出会い、信仰を得た。神学校で先生方、教会で一途に伝道する牧師たち、伝道者になろうと志した友人たち、また遣わされた諸教会で信仰を共にした兄弟姉妹たち、彼らとの出会いによって、いかに豊かな人生を与えられたかを感謝をもって思う。